

Śrīharṣa の知覚論批判

川 口 賢

Vedānta 学者 Śrīharṣa の Kh については、幾多の逸話が伝えられている。Udayana に対して父の仇を討ったとか、また Nyāya 学派を徹頭徹尾批判したために Navya-nyāya 学派の出現を促した等であるが¹⁾、それほど、この作品が他学派、特に Nyāya 学派の注目を集めたことは否定できないことであろう。一方、Vedānta 学派においては、Citsukha が Śrīharṣa の論証方式を取入れ、認識論の発展に貢献したとされる²⁾。

Śrīharṣa は、みずからの見解を述べずに、もっぱら相手の見解を否定するという態度を取るが、この論法は一般に vitaṇḍā と呼ばれるものである。これは、中観学派の Prāsaṅgika の論法に酷似し、彼自身も、「空性説 (śūnyavāda) や不可詮説 (anirvacanīyapakṣa) に従うならば、それ (否定の論理) は、矛盾なく、すべてに適用される」と述べて、中観学派の論法との密接な関係を示唆している³⁾。

Kh は簡潔な文体で書かれてはいるが、内容が極めて難解であるため、幾多の注釈が造られている。この作品に関するかぎり、本格的研究に値するものは久しく見当らなかったが、最近に到って Granoff 博士による研究書が出版された⁴⁾。

ここでは、Kh 第一章に取扱われる知覚論批判をとりあげ、その冒頭に位置する Nyāya 学派の lakṣaṇa に関する議論を検討すると共に、そこで批判の対象とされる出典を探ることによって Granoff 博士の研究を補足することにしたい。

Nyāya 学派の直接知覚の定義として「感官と対象との接触によって生じた知が直接知覚である⁵⁾」を挙げ、これを批判するという形が取られているが、その批判の本質は、lakṣaṇa と lakṣya に関わる議論にあることに注目するべきであろう。

上述の定義中に述べられる lakṣaṇa の目的として、Kh は次の五つの選択肢 (koṭi) を想定する。

- I. 〈同類〉と〈異類〉から lakṣya を排除するため lakṣaṇa を示す。
- II. 〈直証性〉(sākṣātkāritva) を認識するためこの lakṣaṇa (=証因, cihna) を示す。
- III. 〈言語表現〉(vyavahāra) のため。

Ⅳ. “pratyakṣa” 等の語の直接指示機能を確定するため。

Ⅴ. 他の何らかのため⁶⁾。

これら五つの koṭi いずれを取っても不都合が生じることを論証するが、特に最初の二つの koṭi に重点を置いて議論し、他の三つは「前と同様である」という形で述べるにとどまっている。これに対応する議論が Udayana の Kir に見られ、最初の三つの koṭi に当たるものが列挙されている。ここでは、Kir の議論との対応を中心として、Kh の批判を検討したい。

まず、I. に挙げた lakṣaṇa の目的は、NV においてもすでに見られ⁷⁾、その他の Nyāya 学派の著作においても一般的に認められていた見解である⁸⁾。NVTṬ は、「〈同類〉〈異類〉から lakṣya を排除する」という目的を持つ lakṣaṇa を “kevalavyatirekīhetu” であると規定しており⁹⁾、Kir もその考えに従っている¹⁰⁾。

Kh の批判は、まず、何を基準として〈同類〉と呼ぶのかについて、i) “pratyakṣatva” か、ii) 「それ以外のダルマ」か、という koṭi に始まる。i) “pratyakṣatva” とすれば、pratyakṣa から pratyakṣa が排除されることは理解できないし、仮にそれを認めても、avyāpti になるとする。ii) 「それ以外のダルマ」例えば “prameyatva” を基準とすれば、すべての事物は〈同類〉に属することになるから、〈異類〉という語は無意味となってしまう¹¹⁾。

一方、NVTṬ や NM では、“pramāṇatva” を基準として、“anumāna” 等が〈同類〉であるとする¹²⁾。

これに対して、Kh は “pratyakṣa” もまた “pramāṇa” という点で〈同類〉であるから、lakṣya が存在しないことになると論駁し、〈同類〉と〈異類〉という語よりも、〈lakṣya と異なるもの〉という語を用いるべきであると説く¹³⁾。

他の Nyāya 学派の著作にも〈同類・異類〉を〈他のもの〉という語で置換えた表現が見られる¹⁴⁾。

これに対して、Kh は、「lakṣya と異なる」ということが他のものにおいて知られるなら、「他のものから異なる」ということもまた lakṣya において必然的に知られる。従って、lakṣaṇa の目的は、lakṣaṇa を述べる前にすでに達せられているので、lakṣaṇa を述べることは無意味であると論難する¹⁵⁾。これと同様の議論は、Kir に見られ、そこでは「他からの排除が知られているのであれば、sādhana は無意味である」という敵者からの反論として想定されている¹⁶⁾。上述の Kh の議論は、Kir が想定したこの反論を逆に利用したものと考えられる。Kir はこの反論に対して、「ある一部のものに関しては、他からの排除が知られ

るが、すべてに関して知られるのではないから、lakṣaṇa は無意味ではない」という趣旨を述べて答えている¹⁷⁾。

おそらくこの議論を念頭に置いた上で、Kh は「lakṣaṇa 自体が知られないこと」を様々な koṭi によって示したのであろう。要約すれば¹⁸⁾、lakṣaṇa が知られないなら ativyāpti となり、知られるとしても、〈感官〉、〈接触〉はもとより超感官的なものであるから知られ得ないとする。また、知等という結果を証因としては、問題の lakṣaṇa を推論することも不可能であるとする。その理由を「結果からは、原因に遍満する性質が知られるのではないから」と述べている¹⁹⁾。

Kh は一步譲って、結果は〈直証性〉という一つの jāti を持つので、これによって単一の原因が推論されるとしても、〈直証性〉という jāti によってこそ、〈同類・異類〉からの排除があるから、〈直証性〉によって“lakṣaṇa”を推論し、その後〈同類・異類〉からの排除を知るとするのは、〈冗慢〉(gaurava) であるとする²⁰⁾。

さて、第二の lakṣaṇa の目的とされる「〈直証性〉を認識するため、この lakṣaṇa (=証因, cihna) を示す」という koṭi については、Kir は「lakṣaṇa, cihna, līṅga という三つの語は同義語である」という NBhū の説をあげ、それを否定している²¹⁾。また、NBhū は「avyāpaka, ativyāpaka であっても lakṣaṇa であり得る」ということを認めている²²⁾。このことから、sapakṣa の存在が許されるので、NBhū では lakṣaṇa は anvayihetu としても認められることが理解される。しかしこの説は、いわゆる正統派説、すなわち「lakṣaṇa は kevalavyatirekīhetu である」とする説に反するので、Kir も正統派説に従って、NBhū 説を否定している。

Kir 説と NBhū 説を巧妙に使い分けて、Kir 説が相互依存の誤謬に陥るか、あるいはみずから否定する NBhū 説と同じことになってしまうことを、Kh は論証する。すなわち、前述のように、lakṣaṇa は〈直証性〉の知によってのみ知られるが、一方、ここでは lakṣaṇa によって〈直証性〉を立証するのが目的であるから、相互依存の誤謬となってしまう。

もしそれを避けるために、他の何らかの証因 (x) によって lakṣaṇa が立証されるとしても、実際には〈直証性〉以外の証因は lakṣaṇa に遍満するものではあり得ないから、証因 (x) は avyāpaka である。従って、証因が行きわたっていない lakṣaṇa の一部は、依然として立証されないままである。従って、そのような lakṣaṇa は、lakṣya に対して avyāpaka である。もし、そのような

avyāpaka である lakṣaṇa を正しい lakṣaṇa とするならば、Kir 説は NBhū 説と変わらないことになってしまうのである。

さらにこの誤謬から逃れるため、新たな証因 (y) 等によって、未だ立証されていない lakṣaṇa の一部を立証するという方法を、Kh は反論として想定するが、しかしこの方法自体、まさに NBhū の取る方法に他ならないのである²³⁾。さらに、そのような方法を取ったとしても、依然として lakṣaṇa の一部は知られ得ないから、前と同様に、みずからが否定した説と異ならないことになってしまう²⁴⁾。

つぎに第三の lakṣaṇa の目的に関して検討すれば、lakṣaṇa を kevalavya-tirekīhetu として、Kir は述べている²⁵⁾。これに対しても同様に、lakṣaṇa が知られ得ないという誤謬が依然として残り、あるいは〈直証性〉を証因として推論されるとしても、〈直証性〉によってこそ lakṣaṇa の目的は達せられるから、〈冗慢〉という結果になるとする²⁶⁾。

結論として、Kh は、Kir の提示した三つの koṭi を採用していることや、Kir の議論と多くの点で対応していることから、Kir のこの部分を批判の直接的対象としていることが知られよう。また、

i) 第一の koṭi で、他のものからの排除が知られるならば、lakṣaṇa は無意味であるという Kir の想定した敵者の反論を、そのまま論難の手段としている。

ii) 第二の koṭi で、Kir に見られる NBhū への批判を逆に利用して論駁している。

という例から、Śrīharṣa の論法の特徴の一つとして、論争相手が批判する説を逆に利用して論難の手段として用いるという態度を見出すことができよう。

[略号] Kh: *Khaṇḍanakhaṇḍakhādyā*, Kashi Skt. Series 197. (Varanasi, 1970) NV (Tṭ): *Nyāyavārttika (Tātparyatīkā)*, Mithila Institute Series 20. (Darbhanga, 1967) NM: *Nyāyamañjarī*, Oriental Research Institute 116. (Mysore, 1969) NBhū: *Nyāyabhāṣaṇa*, ed. by Svami Yogindrananda, (Varanasi, 1968) Kir: *Kiraṇāvalī*, Gae-kwad's Oriental Series 154. (Baroda, 1971)

[注記]

1) Cf. Phyllis Granoff: *Philosophy and Argument in Late Vedānta: Śrī Harṣa's Khaṇḍanakhaṇḍakhādyā*, (Dordrecht/Boston, 1978) pp. x, 61.

2) Cf. V. A. Sharma: *Citsukha's Contribution to Advaita*, (Mysore, 1974) pp. 22-30.

3) Kh p. 126.

- 4) 注記 1) 参照。
- 5) Cf. *Nyāyasūtra* I-i-4.
- 6) Kh p. 275.
- 7) NV p. 184.
- 8) Cf. NM p. 171, NBhū p. 86.
- 9) NVTṭ p. 186.
- 10) Kir p. 29: atha kim etal lakṣaṇaṁ iti? ucyate/ kevalavyatirekīhetuviśeṣa eva lakṣaṇam/ tathā cācāryāḥ “samānāsamānajātīyavyavacchedo lakṣaṇārthaḥ” iti/
- 11) Kh pp. 275-276.
- 12) NM p. 171, NV p. 209.
- 13) Kh pp. 276-277.
- 14) NV pp. 185-186, Kir p. 29.
- 15) Kh p. 277.
- 16) Kir p. 29.
- 17) Ibid.
- 18) Kh pp. 277-278. この解釈は, Kh, ed. by Svami Yogindrananda, (Varanasi, 1979) に含まれる *Khaṇḍanaphakkikavibhañjana* 及びその Hindi 注に依った。
- 19) この理由づけに関しては, *Nyāyakusumāñjali* の議論を用いたものであるという Granoff 博士の指摘がある。See Granoff, *op. cit.*, p. 45.
- 20) Kh pp. 278-279.
- 21) Kir p. 30: yat punar āha bhūṣaṇo “lakṣaṇaṁ cihnaṁ līṅgam iti pryāyā” iti, tad asat, cf. NBhū p. 7: viśeṣāṁka-cihna-lakṣaṇa-śabdhānāṁ paryāyatvāt/
- 22) NBhū p. 8.
- 23) *Ibid.*: lakṣyāntare tu muktātmātau ukta-lakṣaṇābhāve 'pi lakṣaṇāntarād ātmādi-vyavahāraḥ sidhyati.
- 24) Kh pp. 280-281.
- 25) Kir pp. 29-30.
- 26) Kh p. 282.

(広島大学大学院)